

<研究ノート>

筑後洋画ゆかりの地を訪ねて —青木繁と坂本繁二郎を中心に—

今 林 直 樹

はじめに

1. 久留米

- (1) 青木繁旧居
- (2) 坂本繁二郎生家
- (3) けしけし山
- (4) 石橋美術館

2. 八女

- (1) 岡山公園
- (2) 坂本繁二郎住居
- (3) アトリエ
- (4) 八女市立図書館とその周辺

おわりに

はじめに

本稿は、いわゆる「筑後洋画」ゆかりの地としての久留米と八女に色濃く残る二人の洋画家、青木繁と坂本繁二郎の「記憶の場」を紹介することを主たる目的とする⁽¹⁾。これは「筑後洋画」における風景について考察するための予備作業として位置づけられるものである。

ところで、「筑後洋画」あるいは「筑後画壇」という用語について、日本近代美術史の研究者である植野健造は「そもそもそのような用語は成立し通用するものであろうか」と自問するとともに、「とくに『筑後画壇』という言い方は、日本文化史全体に照らしてみると、やや僭越な呼称にも思われる」と述べている⁽²⁾。この自らの問いに対して植野は「明治以降の筑後地方出身の洋画家たちの活躍ぶりを考えるとき、そうよびうる状況があったと云いうるし、事実、そのような用語が九州のジャーナリズムでふつうに用いられてきたのである」と記して「筑後画壇」という用語を肯定するとともに、筑後地方でこのような状況が生まれたいくつかの背景の中でその最大の要因を青木繁と坂本繁二郎の存在に求めることができると述べている⁽³⁾。

ここで青木繁と坂本繁二郎の略歴を簡単に振り返っておこう。

青木繁は明治15（1882）年7月13日、久留米市荘島町に、旧久留米藩士の青木廉吾とマサヨの長男として生まれた⁽⁴⁾。17歳で洋画研究のため上京し、小山正太郎の不同舎に入門、次いで18歳で東京美術学校西洋画科選科に入学する。その後、「自画像」「海の幸」「わだつみのいろこの宮」などの代表作を発表したが、明治41（1908）年から放浪生活を送るようになった。それでも放浪の先々で「二人の少女」などの秀逸な作品を遺したが、その後、肺結核を患い、明治44（1911）年3月25日、福岡にある入院先の松浦病院でこの世を去った。享年28歳であった。そして、青木はその死後から「夭折の天才画家」としてその悲劇的な生涯とともに神話化されていくことになるのである。

坂本繁二郎は青木と同年の明治15年3月2日、久留米市京町に、旧久留米藩士の坂本金三郎と歌子の次男として生まれた⁽⁵⁾。明治35（1902）年、徴兵検査のため帰郷していた青木から影響を受けて青木とともに上京し、小山の不同舎に入門する。その後、半世紀以上にわたって牛、馬、能面、月などをモチーフとして描き、数多くの作品を遺した。その間、大正10（1921）年から13（1924）年までフランス留学を果たして「帽子を持てる女」や「ブルターニュ風景」などを発表した。帰国後、久留米、次いで八女に住んで絵を描き続け、その画風は、フランスからの影響も反映させつつ、やがて東洋的な幽玄の世界へと向かって行った。昭和31（1956）年、74歳で文化勲章を受章し、その後も画業を続けたが、昭和44（1969）年、八女にて87歳の生涯を閉じている。

ところで、青木と坂本は、日本近代美術史において、これまでに何度も比較の対象として取り上げられてきた⁽⁶⁾。中でもよく知られているのは、青木と坂本の共通の友人であった梅野満雄の次の文章であろう⁽⁷⁾。

青木と坂本。彼等が大いに似て大いに異う処が面白い対照だ。同じ久留米に生まれて然も同年。眼が共に乱視。彼は浮き是は沈む。彼は動是は静。荘島と京町と町は違ふが同藩の士族。青木は天才、坂本は鈍才。彼は華やか、是は地味。青木は馬で、坂本は牛。青木は天に住み、坂本は地に棲む。彼は浮き、是は沈む。青木は放逸不羈。坂本は沈潜自重。青木は早熟、坂本は晩成。

この梅野の対比からわかるとおり、青木と坂本は、画家として、また一人の人間として、実に両極端とも言えるほどの独特の個性を備えていたのであるが、そうであればこそ、植野の言うように、青木と坂本という「二人の画家の存在が、筑後洋画確立の二つの基本軸となっていることはまちがいない」⁽⁸⁾ということになる。

以下、本稿では、「筑後洋画」ゆかりの地として、はじめに久留米、次いで八女に残る青木と



写真1 青木繁旧居外観



写真2 青木繁旧居内部

坂本の「記憶の場」を紹介していく。

1. 久留米

(1) 青木繁旧居

青木は荘島尋常小学校、久留米高等小学校を経て久留米中学明善校に進学するが、17歳の時、同校を退学し、画家を志して上京する、この「青木繁旧居」は青木が上京するまで過ごした家である(写真1、2、筆者撮影、以下同じ)。この青木の実家について、坂本は青木の思い出を記した「追想記」に次のように記している⁽⁹⁾。

君の実家と自分の家は十町とは離れて居なかったけれども、別々の町ですべての関係が違って居たし、また学校は同じ級にもなったが、多数の生徒の中の事ゆえ別にさしたる知り合ひでもなかった。君の実家のあったところは荘島町といって、一寸東京でなれば小石川の小日向台町に似た土族屋敷であった。

なお、この文章に続けて、坂本は次のように記している⁽¹⁰⁾。

今佐賀中学の図画の教師をされて居る森三美氏、その時分は久留米市に唯一の洋画家で、その門に就て居た時、君と落合ったのが絵の上の君を知る始めて、その時君は鉛筆で動物の骨格か何かの模写を二三枚位して居たかと思ふ。

この文中に出ている森三美は、当時、坂本のいう「久留米市に唯一の洋画家」であり、植野の表現にしたがえば、「明治中期に京都で学んだ洋画の技法を久留米の地にもたらした」人物で、

その意味で「筑後洋画山脈の祖」あるいは「筑後洋画の先覚」として記憶されるべき人物であった⁽¹¹⁾。森は、明治27年7月に久留米高等小学校の教員となって図画を担当し、あわせて日吉町の自宅で画塾を開いて子どもたちに洋画を教えていた。青木が森の画塾で洋画を習い始めたのは、久留米高等小学校を卒業して久留米中学明善校に入学した明治28（1895）年、すなわち青木が13歳の頃からである。坂本は、久留米高等小学校卒業後、家庭の事情で進学を断念していたが、森の画塾には青木よりも早い明治25（1892）年から通っており、この頃は森から洋画の手ほどきを受けつつ絵を描いて過ごしていた。青木と坂本は久留米高等小学校では単に同級ということではなかったが、青木の入塾後はともに森の画塾生として「絵画」を共通項に交友を深めていくこととなった。森は、大正2（1913）年、41歳という短い生涯を終えるが、ともに画家となって以後の青木と坂本の関係に思いを致すとき、そして何よりも森に始まる筑後洋画の系譜を考えると、この森と青木、坂本との出会いは決定的な意味を持つと考えることができる⁽¹²⁾。

森の画塾で絵画に自分の進むべき道を見い出していた青木は、この「旧居」から日吉町にある森の画塾に通い、画家としての自分の将来に夢を馳せていたことであろう。その意味で、この「旧居」こそは絵を描くことの喜びと夢に溢れ、生き生きとしていたであろう少年時代の青木の記憶が残る場となっているのである。

なお、この青木の旧居について、日本近代美術史研究者の田中淳は、「現在では、久留米市と『青木繁旧居保存会』によってすっかり復元整備され、公開されていました。平日ながら来館者がたえることなく、さらにテレビ局の取材クルーが入っていたりして、なにか新しい観光スポットになっているようでした」と記し、それを「すこし残念におもいました」との感想を述べている⁽¹³⁾。

しかし、筆者はこの青木繁旧居で田中とはまったく異なる経験をしたことを記しておきたい。青木の旧居は久留米市市民文化振興課の所管で、「青木繁旧居保存会」によって管理運営されている。しかし、見学料は無料で、その運営は保存会の方々のボランティア活動によって運営されている。保存会現会長の荒木康博氏によれば、見学者の半数は県外からの来館とのことで、遠方からの来館者に単に青木の旧居だけを見てもらうというだけでは十分ではないとの思いから、「海の幸」や「わだつみのいるこの宮」「二人の少女」、そして青木の絶筆となった「朝日」など青木の代表的な作品の複製を展示するとともに、青木に関する図書資料は言うまでもなく、過去にテレビ番組として放映されたものなどをDVD資料として整理し、利用希望者に提供している。その資料には青木の子の福田蘭童や孫の石橋エータローに関するものも含まれている。例えば、その中にはかつてNHKで放映された「ぐるっと海道3万キロ 『海の幸』の生まれた浜 房州布良、三代の訪問者」という、ピアニストであった石橋エータローがピアノの弾き語りで福田蘭童との思い出を語るというものもある。それを現会長の荒木氏は手を尽くし

て入手したという経緯がある。筆者は、旧居訪問時に荒木氏からこうした青木だけではなく福田や石橋に関するエピソードや旧居の保存と運営に関する苦労話を含めたお話を静かな雰囲気の中でうかがうことができ、あらためて青木繁と彼を取り巻く人々に思いを馳せるとともに、今なお青木は久留米の人々の心の中に生き続けていて、人々を結びつける結節点となっていることを感じることもできたのであった。

なお、旧居内には青木や森、坂本の他に、吉田博、松田諦晶、古賀春江、高島野十郎など筑後洋画の系譜をたどることができるコーナーも設けられており、久留米洋画に関するまとまった知識を得られることもあわせて紹介しておく⁽¹⁴⁾。

(2) 坂本繁二郎生家

坂本は自身の生家について、次のように記している⁽¹⁵⁾。

私は明治15年3月2日に久留米市の京町というところで生まれました。京町は国鉄久留米駅の裏手にあたり、梅林禅寺の門前一带で、いまは工場や住宅がたて込んでいますが、その当時は久留米藩の中級武士の屋敷町になっていました。私の生家はいまも不思議に、昔のおもかげを残しているようで、庭こそ狭くなりましたが、棕ややつでの木などは枯れたり、切られたりせず残っています。

坂本の生家は久留米に残る唯一の武家屋敷ということで、平成15(2003)年に久留米市指定有形文化財となっている(写真3、4)。坂本が、久留米高等小学校卒業後、家庭の事情で進学を断念したと先に記したが、それは父の金三郎が、坂本が4歳の時に39歳の若さでこの世を去り、坂本家の生計を母の歌子が一身に背負うことになったという苦しい経済事情があったからである。坂本は、母が「部屋貸しをししたり、屋敷内の土地を切り売りしたり、針仕事をしたり、



写真3 坂本繁二郎生家



写真4 坂本繁二郎生家中庭



写真5 筑後川

手内職をしたり、ときには困り抜いて身内にもすがっていたようです」⁽¹⁶⁾と回想しているが、その暮らしは決して容易なものではなかったことがうかがわれる。さらに、坂本が18歳になったばかりの明治33（1900）年3月15日には、京都の第三高等学校に在学中であった兄の麟太郎が病死し、坂本家は一層大きな打撃を受けたのであった。

この頃の坂本のこうした経済的苦境に手を差し伸べたのは森三美であった。森は坂本の

画才を認めており、明治34（1901）年、自身が東筑中学校に転任するにあたり、尽力して自分の後任として坂本を久留米高等小学校の図画代用教員にしている。

ところで、坂本の生家のすぐ近くを筑後川が流れている（写真5）。坂本は後に「絵を描かないときは、家の近くを流れる筑後川でもっぱら魚取りでした。これは相当の腕前だったと思います」⁽¹⁷⁾と記しているが、後述するとおり、坂本はフランス留学に際してもわざわざ釣竿を持って行っているところからわかるように、大の釣り好きであった。坂本は父亡き後の経済的苦境に対して「どこもこんなものだろうと思って別段苦にもせずのんきなもの」だったと語っているが、それでも子ども心に気にかけていたのであろう、「筑後川で遊び半分ですべてくる川魚が、けっこう夜のお菜になって『これでいくぶんは家計の足しになった』」⁽¹⁸⁾と思ったりしたと回想している⁽¹⁸⁾。

この坂本の生家とその近くを流れる筑後川は、そうした坂本の少年時代の思い出が色濃く残る記憶の場となっているのである。

（3）けしけし山

先述のとおり、青木繁は、明治44（1911）年3月25日、肺結核のため福岡の松浦病院でこの世を去った。青木は、明治43（1910）年11月22日、入院先の松浦病院から八女にある母マサヨの実家に身を寄せていた姉の鶴代と妹のたよ子に宛てて書簡を送っている。そして、その中で青木は次のように記すのである⁽¹⁹⁾。

火葬料位は必ず枕の下に入れて置候に付、夫れにて当地にて焼き残りたる骨灰は序の節高良山の奥ケシケン山の松樹の根に埋めて被下度、小生は彼の山のさみしき頂より思出多き筑紫平野を眺めて、此世の怨恨と憤懣と呪詛とを捨てて静に永遠の平安なる眠りに就く可く候

この青木の書簡が、大正2（1913）年に刊行された『青木繁画集』（政教社）の中で友人の梅野満雄によって紹介され、これを機に梅野や坂本など青木を取り巻く友人たちがこの青木の遺言を実現するべく、けしけし山山頂に青木の歌碑を建立する計画を進めたのであった。しかし、この計画が実現するのは昭和23（1948）年4月のことであり、青木の死から実に37年余りの月日が経っていた⁽²⁰⁾。

この「けしけし山」というのは通称で、子どもの芥子坊主に似ているところからそう呼ばれていたが、北面から仰ぐかっこうが兜の形に似ているということで「兜山」とも呼ばれていた。坂本の「青木繁之碑建設の辞」⁽²¹⁾によれば、青木の歌碑となった碑石は、選定されて山頂に運搬される途中で難路のために谷間に墜落したりしたが、4度目ようやく成功に至ったものであった。坂本は青木の遺した歌の中から「わがくには つくしのくにや しらひわけ ははいますくに はじおほきくに」を選び、歌碑はそれを坂本が碑石に墨書したものを彫り付けて完成した（写真6）。坂本にとってけしけし山は「青木と同じく、私にも登りなれたなつかしい山々」⁽²²⁾であった。青木はこのけしけし山の山頂から筑後平野を眺めて「この世の怨恨と憤懣と呪詛とを捨てて静に永遠の平安なる眠りに就く」と遺言したが、そこからの眺めはまさに青木の望んだとおりのものであったに違いない（写真7）。

なお、青木が亡くなった3月には、下旬の日曜日を選んで、毎年「けしけし祭り」が久留米連合文化会の主催で開催されている。これは青木の遺族や市民がいっしょになってこの歌碑に「かっほ酒」を注ぎ、青木の功績を偲ぶというものである。青木の歌碑については、現在は閉鎖されている旧兜山キャンプ場の中にあり、通常は入ることはできないが、「けしけし祭り」の日限り入ることができる。

（4）石橋美術館

現在、久留米にある石橋美術館は2006年に開館50周年を迎えた。その記念展覧会として開催



写真6 青木繁歌碑



写真7 けしけし山からの眺望

されたのが「坂本繁二郎展」である。石橋美術館の開館に坂本が関係していることはよく知られている。この点について、石橋は次のように語っている⁽²³⁾。

坂本さんは、「日本の画家として、また自分の大先輩として、また日本の大天才として青木繁君は、非常な郷土の誇りである。どうしてもこの青木繁のことは、世の中から、後世に消えるようなことがあっては残念だ。何とか遺作品が久留米地方にも散らばっているのを、何とか集める工夫をしたいから」というお話がありまして、それで私、元来そういうことは好きでもありますし、お手伝いしましょうということで、坂本さんがいろいろ絵を見てくださったり何かして、青木繁の絵を、最初、久留米時代に集めました。

（中略）

そして坂本さんが「何か久留米でもいい東京でもいい、小さい青木の美術館を建ててもらって、後世に残すということが、非常に郷土の誇りでもあり、日本の誇りでもある」というようなご希望を述べられておりました。

以上が、石橋美術館開館の事情と坂本との関係である。

坂本と石橋との関係は坂本の久留米高等小学校における図画代用教員時代にさかのぼる。先述のとおり、坂本は明治34（1901）年、坂本が19歳のとき、森三美の後任として久留米高等小学校に勤務する。坂本が代用教員としてこの短い期間に教えた教え子の中に石橋がいたのである。この短い期間における坂本と石橋の出会いが石橋美術館の開館につながったのであった。この美術館建設の話は、昭和5（1930）年、石橋が40歳のときであったが、以後、石橋は坂本の絵はもちろん、青木の遺作を中心にコレクションを揃えていくのである。

現在、同美術館では、青木繁の作品としては東京美術学校の卒業制作である「自画像」や青木の名を一躍有名にした「海の幸」、その他にも「わだつみのいろこの宮」「月下滞船図」「海」などが所蔵展示されている。坂本の作品としては坂本のフランス留学のきっかけとなった「牛」やフランス滞在期の作品である「帽子を持てる女」「ブルターニュ風景」「少女」、そして帰国後の作品である「放牧三馬」などが所蔵展示されている。そして、筑後洋画の作品としては青木や坂本の作品の他にも松田諦晶、古賀春江などの作品が所蔵展示されている。

なお、坂本のフランス留学期間中の資料も保管されており⁽²⁴⁾、また、敷地内には坂本のアトリエも復元されている。この坂本のアトリエについては次章で触れたい。



写真8 青木繁歌碑



写真9 岡山山頂からの眺望

2. 八女

(1) 岡山公園

この岡山公園は八女市北部の室岡に位置する岡山という小高い丘陵に建てられた小さな公園である。ここにも青木繁の歌碑がある（写真8）。

八女における青木の歌碑は、青木と坂本の生誕120周年を迎えた平成14（2002）年に「八女・本町筋を愛する会」によって建てられたが、これは青木の母マサヨが室岡出身であったことにもよる。その歌碑には、けしけし山に建てられた碑石に刻まれている青木の「わがくには つくしのくにや しらひわけ ははいますくに はじおほきくに」という歌が刻まれている。岡山山頂からは八女の風景が一望できる（写真9）。

日本近代美術史の研究者である田中淳は「画家がいる『場所』」について、フランス留学から帰国後に久留米、そして八女に居を構え、八女でその生涯を閉じた坂本のことに触れているが、岡山公園からの眺望について次のように記している⁽²⁵⁾。

ここはちょうど八女の市街地を一望できる展望台にもなっていました。あのあたりが坂本のアトリエがあった「場所」か、とおもいながら北東南の三方を山に囲まれたこの開けた風景を目にしていると、ようやくのこと、すこしだけ画家とこの地との関係が、わかりかけたように感じられました。自然を見つめつづけた画家は、この豊かな自然につつまれていたのだということです。だからこそ画家も、つつまれていることを感じながら、この地にとどまり、描きつづけたのです。谷口氏は、坂本のテーマを「自然」だといわれましたが、まさにこの筑後の自然がテーマになっていたのです。描いても、描いても、描きつくせないからこそ、この地に住みつづけたのでしょう。



写真10 坂本繁二郎住居

なお、この岡山公園からは八女平野と鷲形山を眺めることができる。坂本は「八女風景」「鷲形山」など、数は多くはないが、八女の風景を描いた小品を遺した。坂本は自分が希望するのは「自然との融合」⁽²⁶⁾だと記したが、この岡山公園からの眺望は坂本芸術における自然とは何かについて考えさせてくれる場所だと言うことができるであろう。

（2）坂本繁二郎住居

坂本が久留米から八女に居を移したのは昭和6（1931）年、坂本が49歳の時であった（写真10）。友人の梅野満雄が土地を提供してくれたことが転居のきっかけである。フランスからの帰国後の後半生を送った久留米と八女での生活について、坂本は次のように記している。はじめに、久留米についてである⁽²⁷⁾。

帰国するすこし前、妻は久留米で借家住まいをして待っておりましたが、家の近くにあった筑後川の放水路を散歩した私は、川のかなたに広がるふるさとの、多様な変化を示す雲の姿を見て、久しぶりに自然のうるおいをかぎとることができました。

次に八女についてである⁽²⁸⁾。

思へばこの帰居庵に住みつきました、かれこれ26、7年にもなりますが、一向に飽きが参りません。この辺りは、御覧の様に本当の田舎で、何の変哲もない平凡なところですが、それでも春夏秋冬の自然の移り変わりは身近かに感ぜられて、毎日を楽しく暮してをります。

坂本は、1924年、フランス留学から帰国して、東京ではなくすぐに郷里の久留米に戻った。この点について、坂本は「友人が東京での制作を勧めたが、自分の仕事と目標をどこまでも貫いていきたいので、画壇のわずらわしさが無い筑後の片田舎がもってこいの場と思った」ということを述べている⁽²⁹⁾。坂本は、久留米で7年間過ごし、その後、八女に転居して八女でその生涯を閉じたが、フランスから帰国後の坂本の生活は久留米、そして八女の自然に包まれた中で思う存分に絵を描くことができた幸福なものであったであろう。

坂本は、晩年に月をテーマとする作品を描きつづけた、坂本の死後に「幽光」と名付けられ



写真11 坂本繁二郎アトリエ跡



写真12 坂本繁二郎歌碑

た坂本の絶筆もまた月を描いたものである。坂本にとって描くべき月は満月でなければならなかったが、絶筆には雲に半分以上隠れた満月が描かれている。坂本はこの月を描くということについて、「ここ数年は、月雲を画題に、夜中ふと起きてはながめる月の雲にかかる姿を描いております」⁽³⁰⁾、「しかし月を見ても夜はかけないので頭に入れてだけです。夜中に便所に起きたとき、よい月のとき、いつも頭の中で写生しています」⁽³¹⁾と記している。



写真13 坂本繁二郎アトリエ

坂本が、その晩年、夜中にふと起きて月を眺め画想を得たのがまさにこの八女の住宅の窓からであった。視力が衰えていく中で眺めた月は、坂本の頭の中で一枚の絵の姿となり、キャンパスに描かれていったのである。そこで描かれた月はまさに幽玄の世界そのものであった。

(3) アトリエ

坂本のアトリエは八女の自宅から1キロほど離れたところにあった。十三歩川に沿った場所に建てられたアトリエは、友人の梅野が自宅前の桑畑を提供してくれてできたものであるが、現在、八女にはその跡と坂本の「風となり 雨となるとも われはただ 此姿ままに歩む一筋」という歌を刻んだ歌碑⁽³²⁾ (写真11、12) だけがあり、アトリエそのもの (写真13) は久留米の石橋美術館の敷地内に移されている。坂本はアトリエについて次のように語っている⁽³³⁾。

光こそ自然が語りかけてくれることばとさえ思いました。アトリエの光のぐあいは、制作



写真14 坂本繁二郎アトリエ

する私にとって生死をきめる問題です。ひとつ、ふたつと窓を閉ざしていくうちに、アトリエ中の窓を全部板で打ちつけ、窓からはいる乱反射や雑光を断ち、天窓からの純光で仕事をするくせがついてしまいました。



写真15 坂本繁二郎イーゼル

坂本にとって「光」は作画において重要な意味を持っていた。久留米に移築され復元された坂本のアトリエは壁のほぼ一面が窓になっており（写真14）、しかも天井が高く、外からの自然光が十分に取り入れられるようになっている。そこには坂本が使用したイーゼル（写真15）が残されており、それらを前にすると、窓に板を打ちつけ、光を調整しながらイーゼルに向い、絵を描くことに没頭する坂本の姿が浮かんでくる。その一方で、『坂本繁二郎の道』（求龍堂）を著した谷口治達は、この八女のアトリエについて同書の中で、それが坂本の希望によってパリ・スタイルの本格的なアトリエになったと記し、また、それが「木造ながら近代的な建築であるこのアトリエは九州ではきわめて珍しく、最初は近所の人々や子供が、やがてかなり遠くから画家や興味を持つ人々がアトリエ見学を訪ねてきて、彼の制作を邪魔し困らせた」というエピソードを紹介しているが⁽³⁴⁾、このアトリエから生まれた坂本の作品について谷口は次のように述べている⁽³⁵⁾。

当時としては九州でもっとも近代的なアトリエを、自然のなすがままに埋もれさせ、百姓と変わらぬいでたちで制作する坂本には、やがて自然そのもの、もはや理屈は不要あるがまま本能に任せ、それでいて自然の摂理、生の大目標をめざして懸命に伸びる自然の中の一本の木のような心が開けてきた。アトリエから生まれる作品は、周辺のむせかえる自然との語らいや競争を通じ、自ずと実る果実と共通の意味を持ってくる。

やはりここでも坂本にとっての「自然」の重要性がわかる。先に坂本の望むところは「自然との融合」であると記したが、まさに坂本はこの八女で、自然と向き合って絵を描くということではなく、自らを自然と融合、一体化させていったとみることもできるであろう。

(4) 八女市立図書館とその周辺

八女市には市立図書館があり、その2階が坂本の絵や旧蔵品が展示されている「坂本繁二郎資料室」となっている⁽³⁶⁾。その展示品には坂本の油彩画の複製や自筆原稿、「筑紫五景」といった木版多色刷りの版画などのほかに、「釣り竿」がある⁽³⁷⁾。この釣り竿は坂本が留学先のフランスにも持って行ったものである。先にも記したとおり、坂本は幼少の頃から大の釣り好きで、フランスでも釣りを楽しんだことは有名である。それについて、坂本は次のように記している⁽³⁸⁾。

ところで魚釣りですが、子供時代の筑後川の思い出を過大に評価していたわけでもないですが、パリ暮らしでのおかずは釣りざお一本でまかなうほどの意気込みでした。道具はあちこちのマニアからうらやましがられるほど大したものでしたが、ところ変われば魚まで変わるのか、セーヌの上流で、ボラに似た大きな魚が岩かげからよく顔を出していたので、「ようし、あいつを今夜のおかず」に」と手を変え品を変えてはみたものの、どうしても餌に食いつきません。いまだにそのボラの顔が目浮かぶのです。一度、西洋ウナギをセーヌで釣り上げ、アパートでカバ焼きとしゃれ込んだのですが、脂がよくのっけていて、もうもうと立ち込めた煙が裏庭に流れ出し、アパート中の窓から視線が集まったこともありました。

フランス留学時代の坂本の生活ぶりが目に浮かぶようである。

ところで、この八女市立図書館から徒歩5分の範囲内に、坂本の銅像（写真16）が残る八女公



写真16 坂本繁二郎銅像



写真17 坂本繁二郎筆塚

園や坂本が眠る無量寿院がある。坂本の銅像は坂本が存命していた昭和36（1961）年に除幕式が行われたが、毎年、11月3日の「文化の日」にはこの銅像の前で「帰居祭」と称する祭りが開催され、坂本を偲んでいる。また、無量寿院の納骨堂の前には、平成13（2001）年に坂本の「筆塚」（写真17）が建てられた。

おわりに

以上、筑後洋画を代表する青木繁と坂本繁二郎に焦点をあて、彼らのゆかりの地で、今でもその記憶が色濃く残る久留米と八女についてみてきた。

「筑後洋画」あるいは「筑後画壇」の成立という点から次の2点を指摘して、本稿を締めくくりたい。

第1に、久留米や八女が属する筑後地方は、筑紫平野や筑後川などの自然が豊かであるということである。その豊かな自然が筑後の人々の芸術への関心を、そして画家を育て、彼らはその風景を絵画に残そうとしたのである。青木も坂本も筑後の風景を描いているが、すでにみたように、坂本が「自然との融合」を望み、自然に包まれて絵を描き続けることを願ったのは、まさにこの筑後の自然、風景があったからである。興味深いことに、坂本はフランスに留学してフランスでは「土質にも立樹にも草花の如きものでも其等の自然に魅力がかわいてゐます」⁽³⁹⁾と述べており、フランスの自然に触れたことが郷土の潤いのある自然についてあらためて見直すきっかけになったことがうかがわれる。この「自然」というテーマは、青木、坂本以後も筑後洋画にとっても重要なテーマとなって受け継がれていくのである。

第2に、森三美と彼に続く青木繁、そして坂本繁二郎など筑後画壇を牽引していく画家の存在である。先に見たように、森は青木や坂本にターナーやコンスタブルなど主としてイギリス絵画を手本に洋画の手ほどきをした⁽⁴⁰⁾。その後、青木は小山正太郎の不同舎と黒田清輝の東京美術学校で、坂本は小山の不同舎で画家として成長していき、坂本についてはフランス留学も果たしている。坂本は帰国後に東京ではなく地元の久留米と八女を制作の場として選んだのであるから、こうした先達の存在が地元で洋画を学ぶ者たちにとって刺激にならないはずはない。植野は、坂本の還暦の時のものと思われる集合写真、そこには坂本を囲んで松田諦晶や久留米の洋風美術団体である来目会のメンバーなど20人ほどが写っているのであるが、この写真から「昭和戦前期の筑後洋画壇が最初の成熟期を迎え、その求心的な存在となっていたのが坂本繁二郎であったことを、この一枚の写真はあらためて教えてくれるのである」と指摘している⁽⁴¹⁾。

こうして、坂本の後に続く画家たちが筑後画壇を継承し、さらに発展させていくことになるのである。

註

- (1)筆者は、2013-14年度に本学附属人文社会科学研究所の共同研究「文化における『風景』」に参加した。本稿はその成果の1つである。
- なお、本稿をまとめるにあたっては次の文献を参考にした。田中淳、「坂本繁二郎—八女にとどまるということ」、『画家がいる「場所」—近代日本美術の基層から』、星雲社、2005年、301 - 331頁。田内正宏、「帰国、そして久留米から八女へ」、『石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展』図録、2006年、192 - 195頁。
- (2)植野健造、「序論 筑後洋画の系譜」、『青木繁・坂本繁二郎生誕100周年記念 筑後洋画の系譜』図録、2002年、10頁。なお、植野は古賀春江や松田諦晶の存在と、松田が中心となって大正2（1913）年に結成された「来目会」の重要性もあわせて指摘している。
- (3)同前、11頁。
- (4)青木繁関係の文献は枚挙にいとまがないが、最新のものとしては、青木の没後100年を記念して2011年に石橋美術館、京都国立博物館、ブリヂストン美術館で開催された展覧会「没後100年 青木繁展—よみがえる神話と芸術」図録の森山秀子、植野健造編の「青木繁 文献」（224-234頁）を確認のこと。
- (5)坂本繁二郎関係の文献についても枚挙にいとまがないが、こちらも最新のものとしては、2006年に石橋美術館とブリヂストン美術館で開催された「石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展」図録の後藤純子編「参考文献」（250-259頁）を確認のこと。
- (6)青木と坂本の関係に関する文献としては、次のものを挙げておく。河北倫明、『青木繁と坂本繁二郎』、雪華社、1965年。岸田勉、「青木繁と坂本繁二郎」、岸田勉編著、『近代の美術21 坂本繁二郎』、至文堂、1974年、所収、63-68頁。竹藤 寛、『青木繁・坂本繁二郎とその友—芸術をめぐる悲愴なる三友の輪—』、福岡ユネスコ協会、1986年。同、『青木繁と坂本繁二郎 「能面」は語る』、丸善ブックス、1995年。松本清張、『私論 青木繁と坂本繁二郎』、新潮社、1982年。なお、松本は同書の末尾で「青木繁と坂本繁二郎を比較しての結論をおおざっぱに言えば、青木繁は日本美術史上に必要にして不可欠だが、坂本繁二郎は日本美術史上から落ちてなんの影響もない、ということである」と述べているが、これは同書のタイトルにあるとおり松本の「私論」に過ぎず、筆者はこの結論を認めない。竹藤が『青木繁と坂本繁二郎 「能面」は語る』で述べているように、「日本美の系譜者として日本美術史上、坂本の名は逸すべからざるものである」という見解を支持するものであることを、筆者の立場としてここに明記しておく。
- (7)梅野満雄、「坂本君を語る」、『西部美術』4輯、1947年1月、38頁。
- (8)植野、前掲論文、11頁。
- (9)坂本繁二郎、「追想記」、『坂本繁二郎文集』、中央公論社、1956年、84頁。以下、『文集』と略す。
- (10)同前。
- (11)植野健造、「森三美と青木繁、坂本繁二郎」、『筑後洋画の先覚 森三美』、1997年、13頁。
- (12)坂本は森との出会いについて、次のように記している（坂本繁二郎、『私の絵 私の心』、日本経済新聞社、1969年、19-20頁）。以下、『私の絵』と略す。

親があきれほど絵好きの子もあれば、びっくりするようないまい絵を描く子がたまたまいるものですが、さらにもっと才能を引き出し、導き、開眼させるなにかがなければ、それはひとつのちょっとした話題で終わってしまうものです。私もこの森先生に会わなければ、九州の一隅で絵描きとしてでなく過ごしたことでしょう。それに森先生が油絵を描いていたということがまことに運命的に思われるのです。

(13)田中、前掲、317-318頁。

(14)本文中に記したとおり、青木繁旧居では、「青木繁旧居保存会」の現会長である荒木康博氏から旧居保存に至る経緯やその運営、さらには筑後洋画の系譜についてもいろいろと御教示いただいた。

ここに記して感謝申し上げる。

(15)坂本、前掲『私の絵』、13頁。

(16)同前、17頁。坂本は、未完成とはなったが、母である歌子の肖像画を遺している。その裏には「わか彘かく ははのしろかみ ははのみて かくをいしかと いいしさみしさ」という歌と、「たらちねの いまは夢なる この歳をたへぬき給ふ 痛ましきをいの姿 母と云ふこのよの生命 その今はも今はいまさず 面影を半ばのこして そのをまかげをなかばのこして」という詩が書かれている。この母の絵について、坂本は次のように記している（同前、87頁）。

馬の絵ばかり描き始めて間もなくの昭和2年、私は母の肖像を描きました。なんとはなしに予感があったのでしょうか。しかし描き始めてみると、これほど困難な制作はないと思いました。苦勞ばかり重ねながら、わびしさに耐え、やさしい一方の母の姿を見つめれば、見つめるほど、筆は進みません。問いかけ、語りかけてくるものがあまりに多く、それを押さえ切ることができずに何度も中断したりで、その年の暮れ母は73歳でなくなりましたが、十号の「母の像」は未完成でした。

母の姿を描く坂本の胸には幼いころの苦しい生活を支えていた母の姿が思い起こされていたであろう。

(17)同前、21頁。

(18)同前、17頁

(19)この青木の遺書となった手紙は、現在、石橋美術館の所蔵で、その全文が写真資料として前掲「青木繁展」図録に掲載されている（179頁）。

(20)この間の詳細な事情については、竹藤寛、前掲『青木繁・坂本繁二郎とその友—芸術をめぐる悲愴なる三友の輪—』を参照。

(21)坂本繁二郎、「青木繁之碑建設の辞」、前掲『文集』、272-275頁。

(22)坂本、前掲『私の絵』、103頁。

(23)石橋正二郎、「ブリヂストン美術館開館式における挨拶」、『特集展示 コレクター石橋正二郎 青木繁、坂本繁二郎から西洋美術へ』、2002年、9-10頁。但し、坂本自身は『坂本繁二郎夜話』のなかで、石橋が坂本の名を挙げて美術館建設のきっかけとなったと各所で述べていることを大変恐縮しているとしながらも、「実のところ、私は石橋さんに、青木の絵はよいと讃めましたが、蒐めて欲しいとか、美術館を建てたらなど希望した憶えはありません。これは石橋さんの自発的な案であり行為ではないかと思って居ります」と記しているが、これは美術館建設の功績が石橋にあることを坂本なりの表現で伝えているのであろう（今西菊松編、『坂本繁二郎夜話』、1960年、15頁）。

なお、石橋美術館を含め、石橋にとっての「美術館」については次の文献を参照。宮崎克己、『西洋絵画の到来 日本人を魅了したモネ、ルノワール、セザンヌなど』、日本経済新聞出版社、2007年、362-399頁。

(24)坂本のフランス留学時代の資料を含め、旧蔵図書などが石橋美術館に所蔵されておりその一部は、前掲『坂本繁二郎展』図録で紹介されている（230頁）。

(25)田中、前掲書、323頁。

(26)今西編、前掲書、71頁。

(27)坂本、前掲『私の絵』、80頁。

(28)今西編、前掲書、70-71頁。

(29)坂本、前掲『私の絵』、81頁。

(30)同前、110頁。

(31)同前、121頁。

(32)坂本の歌碑は坂本に師事した画家たちにより結成された一心会によって、平成16（2004）年3月2日に建立された。

ここに刻まれた坂本の歌は昭和25（1950）年、坂本68歳の日記から薫夫人が写し取った筆跡を拡大模刻したものとすることである。なお、坂本の歌碑については、八女市教育部文化課の中川寿賀子氏に御教示いただいた。ここに記して感謝申し上げます。

- (33)同前、90頁。
(34)谷口治達、『坂本繁二郎の道』、求龍堂、1981年、181-182頁。
(35)同前、184頁。
(36)「坂本繁二郎資料室」については、八女市立図書館のホームページ (<http://www.library.yame.jukuoka.jp/>) を参照。
(37)この釣り竿は、八女在住の画家で、坂本の生前に坂本と深い親交のあった杉山洋氏が坂本家から譲られたもので、現在、八女市立図書館に寄託されている。なお、筆者はこの八女市立図書館にて杉山氏から坂本に関する貴重なお話をうかがうことができた。ここに記して感謝申し上げたい。
(38)坂本、前掲『私の絵』、77-78頁。
(39)坂本繁二郎、「巴里通信 (B)」、坂本、前掲『文集』、171頁。
(40)この点について、坂本は次のように記している (坂本、「自分の事」、『文集』、267頁)。

私は明治25年11歳のとき森三美先生について画を習ひ始めた、主として英国系作家のものを印刷物によって模写させられたのであるが、コンスタブルやターナー等の画に接してそれ迄日本画以外見た事のなかった私の心に別世界の生き生きした此世の自然の美しさを子供心にもはっきり教へられ驚歎、それ以来出京する迄十年間夢中になって画を描いた。

- (41)植野、前掲論文「序論 筑後洋画の系譜」、10頁。

(謝辞)

本稿執筆にあたっては、青木繁旧居保存会の荒木康博氏、石橋美術館学芸課の伊藤絵里子氏、久留米市市民文化部文化振興課の草野幸洋氏、八女市教育部文化課の中川寿賀子氏、八女市在住画家の杉山洋氏から、御協力と御教示を得た。ここに記して、感謝申し上げたい。

(2014年10月10日受領、2014年12月5日受理)

(Received October 10, 2014; Accepted December 5, 2014)

